

令和6年度赤野井湾における真珠母貝生産実証事業の効果調査

久米弘人・孝橋賢一

1. 目的

本県における淡水真珠養殖業の再興のためには、真珠母貝の増産が必要である。加えて、母貝生産の拠点となる水域は、水質等の環境変化による生産不振に備えて多数存在することが好ましい。そこで、近年は漁場環境が改善傾向にある赤野井湾において、実証試験として事業規模での母貝生産を行い、真珠母貝生産拠点としての評価を行った。

2. 方法

令和5年10月に赤野井湾内の真珠養殖漁場(図1)のA漁場に2,700個およびB漁場に300個の稚貝を垂下し、各漁場に垂下した稚貝から無作為に抽出した各100個について、令和6年11月に測定を行い、生残と成長の推移を調べた。生残は、1個ずつ目視で生死を確認し、死殻がなく行方不明の個体については死亡したものとして取り扱った。成長は稚貝を写真撮影し、パソコン上で画像データから殻長を測定することにより把握した。

3. 結果

垂下1年後の令和6年11月までの生残率は、A漁場67%、B漁場77%であり、過去5カ年の垂下1年後までの平均生残率80.2%と比べてA漁場でやや低く、B漁場は同程度であった(図2)。また、平均殻長は、A漁場では垂下時17.9mmが、1年後に96.6mmとなり、B漁場では垂下時18.1mmが1年後に95.5mmまで成長した(図3)。両漁場とも過去5カ年の垂下1年後の平均殻長79.0mmよりも大きくなった(図4)。

これまでの結果から、殻長2cm程度で沖出しした稚貝の生残率と成長は共に安定的に良好であり、赤野井湾は沖出し後の母貝の生産拠点になりうると考えられた。

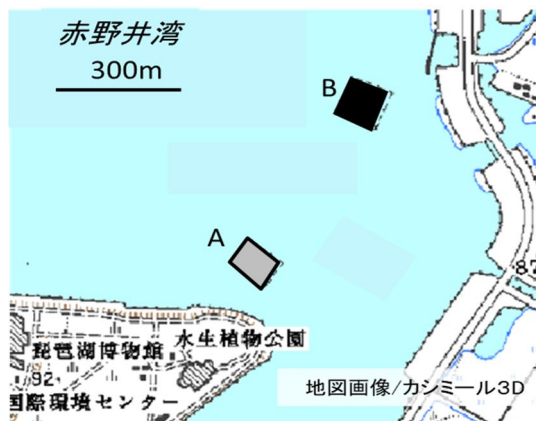
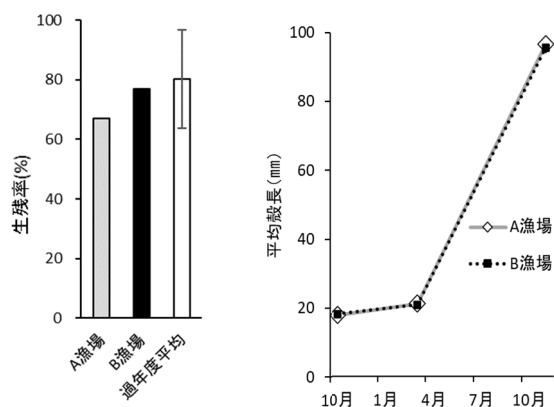
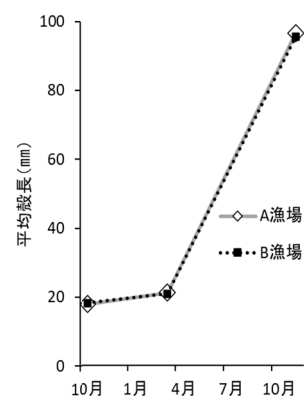
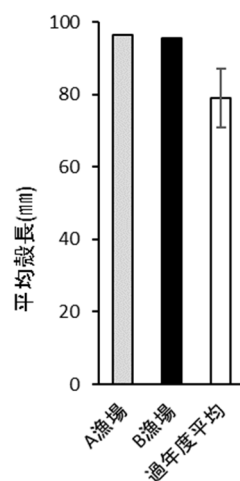


図1 実証試験を行った漁場(A、B)

図2 垂下1年後の生残率
(エラーバーは標準偏差)図3 垂下1年後の
平均殻長図4 垂下1年後の平均殻長
(エラーバーは標準偏差)